児童生徒の実態に合った
自立活動の目標・指導内容設定に向けて

――　シートの開発と15分ディスカッションの活用　――

長期研修員　　松本　理沙

《研究の概要》

本研究は、より児童生徒の実態に合った自立活動の目標や指導内容を設定することを目指した研究である。児童生徒の自立活動の目標や指導内容を設定する場面において、教師の考えを視覚化し思考を整理しながら実態把握や課題の関連性を捉えるため、目標・指導内容設定シートを作成した。また、実態把握の場面や、課題同士の関連性、指導内容を考える場面において短時間で負担感なく取り組める15分ディスカッションを提案した。

目標・指導内容設定シートを用いて思考し、ディスカッションで複数の教師で考えることにより、考えを整理できたり、新たな視点を得ながら多角的に児童生徒を捉えられたりすることを、協力校での実践と、実践後のアンケート調査を通して明らかにした。

キーワード　**【特別支援教育　自立活動　目標設定　指導内容設定　ディスカッション】**

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｉ０１－０１　令和元年度　２７０集

Ⅰ　主題設定の理由

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説（平成29年4月告示）自立活動編(以下、学習指導要領解説)では、「多様な障害の種類や状態等に応じた自立活動の指導の充実が求められている」と記されている。特別支援学級においては「自立活動を取り入れること」とし、通級による指導においては「自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行う」とするなど、自立活動の指導の重要性が示されている。自立活動の個別の指導計画を作成する上で最も重要な点を「実態把握から指導目標(ねらい)を設定するまでのプロセスにある」としている。また、指導の継続性を確保するために「個別の指導計画を確実に引き継いでいく必要」があり、前年度までの担任が実態をどう捉え、なぜその指導目標(ねらい)を設定したのかといった「設定に至る考え方を指導担当者間で共有していくことで、指導の根拠を明らかにしやすくなると考えられる」としている。そのために「個別の指導計画の作成についてさらに理解を促すため、実態把握から指導目標(ねらい)や具体的な指導内容の設定までの手続きの中に『指導すべき課題』を明確にすることを加え、手続きの各過程を整理する際の配慮事項をそれぞれ示すこととした」とある。そして、分析や整理を進めていくために、「特定の教師だけに任せることなく、複数の教師で検討する学校のシステムを構築していくことが望まれる」と、一人の児童生徒に対し複数の教師で考えていくことの重要性を述べている。

群馬県においては、「第２期群馬県特別支援教育推進計画」で、「障害のある幼児児童生徒の将来の自立と社会参加を見据えて、一人一人の能力と可能性を最大限伸長する特別支援教育を更に推進していきます」と記されている。特別支援学校における教育の充実については、障害の特性や発達に係る詳細な実態把握を行い個別の指導計画に生かし、個別の指導計画を活用した授業実践を行うとしている。

また、第１期群馬県特別支援教育推進計画の成果として、特別支援学校の未設置地域に三つの特別支援学校が開校され、高等部も設置された。地域に学校ができ通学しやすい環境が整った子供たちの成長につなげるために、それぞれの学校で充実した教育を進めていく必要がある。そのためには、それぞれの学校の教師の専門性の更なる向上が求められる。

以上のことから、自立活動の目標や指導内容を設定する場面において、思考を視覚化しながら目標や指導内容が設定できるシートを作成することとした。シートを用いることで思考が整理しやすくなり、児童生徒の実態を捉え直すことができる。また、ティームティーチングにおいては、児童生徒に関わる複数の教師がシートで整理した実態を基にディスカッションを行うことで、多角的な視点をもつことができ、考えが広がったり深まったりし、専門性の向上にもつながる。定期的に児童生徒についてのディスカッションの場を設定することで、指導目標や指導内容、指導方法の評価改善を図ることができるのではないかと考えた。思考を整理したり、多角的な視点で考えたりすることを繰り返すことで、より児童生徒の実態に即した適切な目標・指導内容を設定できると考え、この主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

自立活動の目標・指導内容を設定する場面において、教師が児童生徒の実態を把握し、関連性を表すことができるシートを使い、教師の思考の流れを視覚化しながら整理したり、そのシートを用いて複数の教師で多角的な視点で捉えてディスカッションをしたりすることで、より児童生徒の実態に合った目標や指導内容の設定につながることを明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　「指導すべき課題の整理」とは

個別の指導計画の作成についてさらに理解を促すために、実態把握から目標設定までの過程の中に新学習指導要領から示された視点である。指導目標(ねらい)を設定するに至る判断の根拠を記述

して残すことで、設定に至る考え方を整理しながら表したり、指導担当者間で共有したりすることができ、指導の根拠を明らかにすることができる。

学習指導要領に例示されている「流れ図」では、「実態把握→指導すべき課題の整理→目標設定→目標達成のための必要項目選定→項目と項目の関連付け→具体的な指導内容の設定」という流れになっている。流れ図における詳細な流れは以下の通りである。

実態把握は①、②－１、②－２、②－３という四つの過程がある。①では、障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、長所やよさ、課題等について情報を集める。②－１では、集めた情報を自立活動の区分に即して整理する。②－２では、収集した情報を学習上または生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する。②－３では収集した情報を卒業後等(○年後)の姿の観点から整理する。実態把握を基に「指導すべき課題の整理」は、③整理した情報から課題を抽出する、④整理した課題同士がどのように関連しているかを整理した上で、中心的な課題を導き出すという二つの過程がある。

本研究では、自立活動の６区分と「できること、できないこと」などの観点も含めて実態把握をし、付箋に記入する。それを用いて、実態の関連性を課題関連図で表して整理し、関連図を基に中心的な課題を導き出していく。この過程により、中心的な課題を導き出すまでの教師の思考の流れをシートとして残すことができ、次年度以降への引き継ぎ資料としても使うことができると考えた。

(2)　児童生徒の実態に合った目標とは

的確な実態把握に基づいて整理・抽出された「指導すべき課題」を踏まえて定められた目標である。児童生徒の課題や困難を解消するという視点だけでなく、できることをより伸ばすという視点もある。また、ティームティーチングにおいては、一人の教師の見方のみで設定されるのではなく、複数の教師の目で多角的に課題を捉え、設定された目標である。

本研究では、児童生徒の実態を的確に捉えて設定することで、児童生徒が主体的・意欲的に取り組み、達成される目標であると考える。

(3)　思考の流れが視覚化できる目標・指導内容設定シートとは

学習指導要領解説の「流れ図」を基に作成した、「実態をどのように捉え、それらがどのように関連していると捉えたのか」「その関連した実態の中から何を課題とし、目標として設定したのか」「その目標を自立活動の６区分27項目のどこと関連付けて具体的な指導内容を設定したのか」が見て分かるシートである。

実態把握では、実態を「できること、もう少しでできること、できないこと」の観点で６区分に分けて書き出す。書き出した実態の中から残りの在学期間では達成が困難なものや、自立活動の授業では取り組まないことを除き、それぞれの関連性を関連図として作成することで中心的な課題を抽出する。また、具体的な指導内容を決定するに当たり、どの項目を関連付けて考えたのかを、６区分27項目の一覧表の中から線を引くことで表す。各学校の状況に応じ、個別の指導計画として活用できるとも考える。

(4)　15分ディスカッションとは

児童生徒に関わる教師が集まって短時間で気軽に行う意見交換の場である。15分という短時間の設定とすることで、大きな負担感を抱えることなく参加することができる。その日に話し合う内容について、具体的に提示してからディスカッションを行うことで、一つの事柄に対して短時間でも有効なディスカッションをすることができる。

ディスカッションの中で担任以外の教師もその児童生徒の指導に関して自由に意見を出す。児童生徒が抱える課題を確認し、どのような目標でどのような内容を指導していくのかなどについて、具体的に見いだしていく。

複数人の教師が一人の児童生徒の目標や指導内容設定について関わることで、担任の主観による設定となることを避けることができる。また、話合いの場に参加した教師で指導内容を共有することになり、その児童生徒に関わる教師が一貫性をもって指導することができる。そして、ディスカッションに参加した先生方が、他者の考えから新たな考え方や視点を学ぶ場にもなる。

2　教材の概要

(1)　目標・指導内容設定シートの様式について

まず、学習指導要領解説に例示されている「流れ図」に倣って研究協力校(以下協力校)Ａの小学部職員に目標・指導内容設定までに取り組むことを依頼した。その上で、気付いた点や課題と感じた点を整理した。実態把握の段階では、「何度も同じようなことを書いているように感じる」「もっと項目をまとめることができるのではないか」という声が複数聞かれた。

それらの意見を受け、実態把握の段階から自立活動の６区分に分けて記入する形にした。内容によっては複数の区分にまたがることもあるが、その児童生徒にとって主にどの区分での課題かで分ける。シートは表計算ソフトで作成し、区分をプルダウンの中から選択すると項目名が入力されセルの色が変わるようにし、見返したときに区分を分かりやすくした。複数の区分にまたがる実態について記載するときは【環】のように、区分名の一文字目をセルの下部に記載する。

実態を文章で記入する際は、課題点だけでなくできることやもう少しでできそうなことなども記入する。その後、「できること」は◎、「支援があればできること、もう少しでできること」は〇、「できないこと、課題」は△のように観点別に記号を記入する。文字で表すのではなく、記号で表すことにより、視覚的に捉えやすいようにした(図１)。

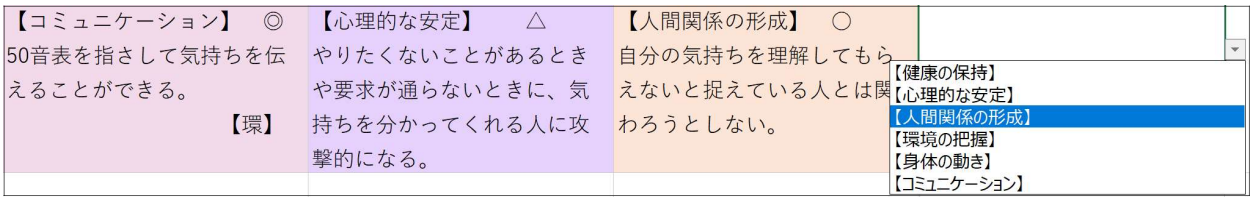
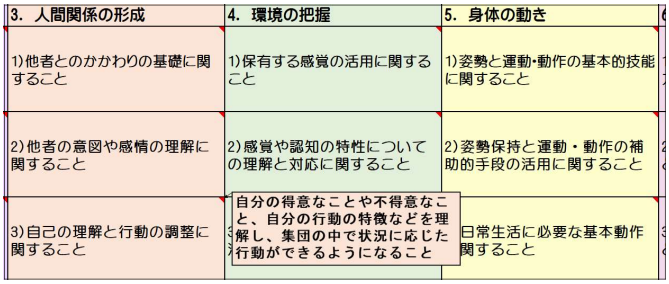


図１　実態把握における区分例(自立活動の区分も記入)

経験年数が少ない教師からは、「どの区分に分ければよいのか悩むことがある」という声があったため、実態把握欄の下部に６区分27項目の一覧を示し、確認しながら入力できるようにした。詳しく内容を知りたい場合には、項目にカーソルを乗せると詳細が表示されるようにした(表１)。

表１　６区分27項目の一覧(一部抜粋)



実態把握で入力した実態は次のシートに付箋として作成される。それらを「原因と結果」「相互の関係」「相反する関係」などの観点で線でつなぎながら関連付け、「指導すべき課題の整理」として、課題関連図を作成する。しかし、作業する場に全ての付箋を貼り付け、線で結び付けると、作業が煩雑になるだけでなく、見た目にも分かりにくい。そこで、課題ではあるが現時点で取り組まないものや、これまで指導してきたが変容が見られないものなどは、作業の場には載せないで枠外に残しておく。もう少しでできそうなことや課題とともに、それらを解決するための強みとなるよさが作業の場に残るので、関連性が考えやすくなると考えた。

関連図の中でたくさんの線が結び付いたものや、その課題を解決することで他の課題の解決に結び付きそうなものを中心的な課題として捉え、目標設定につなげる(図２－②課題関連図)。作成した目標・指導内容設定シートを見ることで、前年度までの担任がどのように実態を捉え、どの部分を課題として考えて目標や指導内容を設定したのかを見て理解することができるので、引き継ぎ資料としても利用でき、指導内容の重複を防ぐことができると考えた。

目標設定の際は、曖昧な表現や意味の広い言葉を使用せず「どのような姿が見られれば目標が達成できたと評価できるのか」が分かるよう、具体的な子供の姿で表現する。場面や条件、相手(誰に対して)、表出の方法、時間や回数などの数値等が具体的に示されることで、観察した事実に基づき行動レベルで評価が可能となる。行動レベルでの評価により普段から関わっている人だけではなく、誰が見ても目標が達成されたかが判断しやすくなる(図２－③目標設定)。

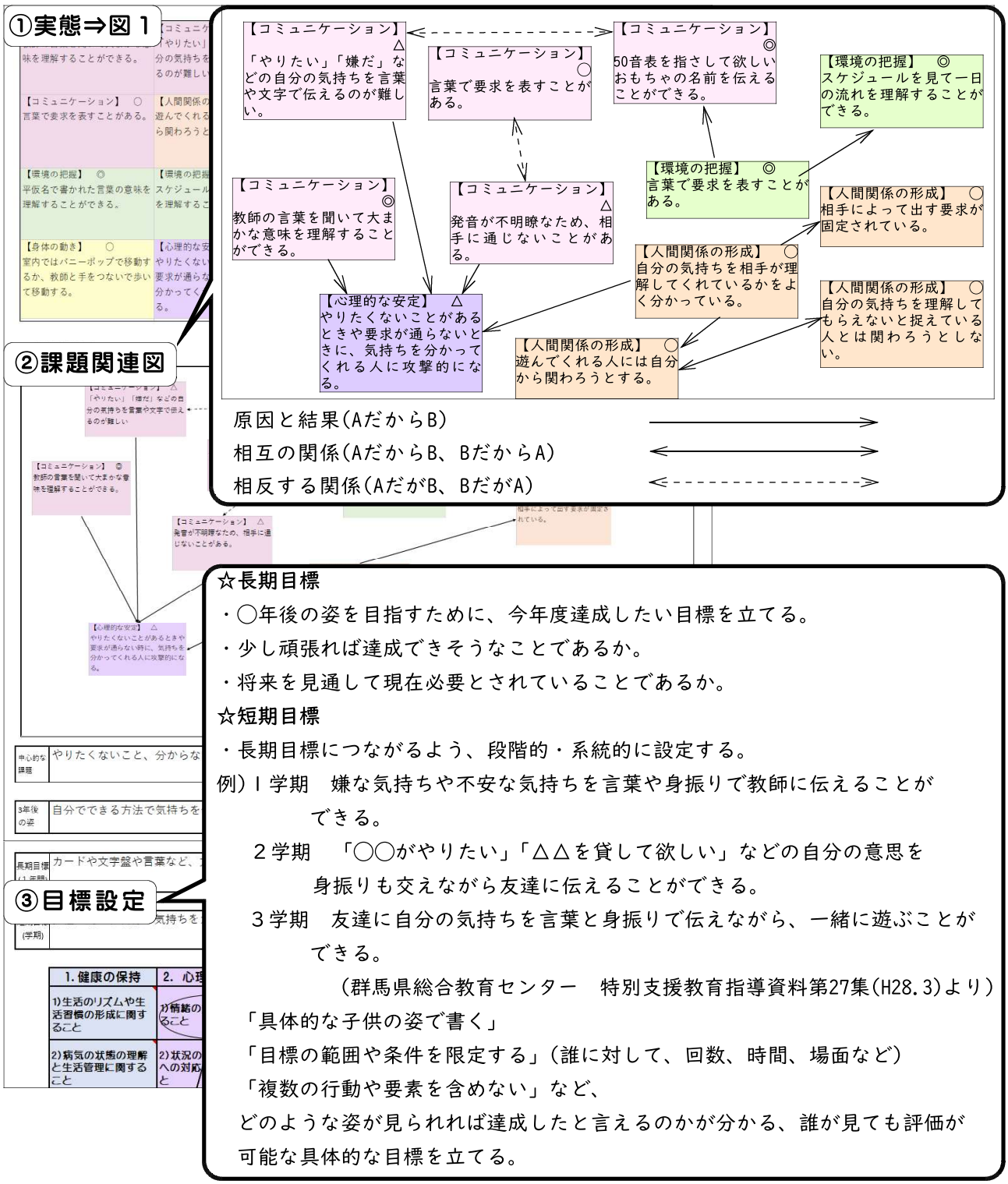


図２　目標・指導内容設定シート記入例と入力画面に示した説明（目標設定まで）

また、保護者には「目標・指導内容・評価」の部分のみを提示する学校でもそのまま使えるよう、目標・指導内容設定シートからリンクを貼り、実態把握や関連図を除いた「目標・指導内容・評価」のみが一枚になったものも自動的に作成されるようにした。

具体的な指導内容を設定する場面では、立てた目標を達成するために、自立活動の６区分27項目の中のどの項目が必要かを考え、目標達成のために必要な項目を関連付け、具体的な指導内容を決める。「主体的に取り組める」「改善・克服の意欲を喚起する」「発達の進んでいる側面を更に伸ばす」「自ら環境を整える」「自己選択・自己決定を促す」「自立活動を学ぶことの意義について考えさせる」などの観点から指導内容を設定する（図３）。

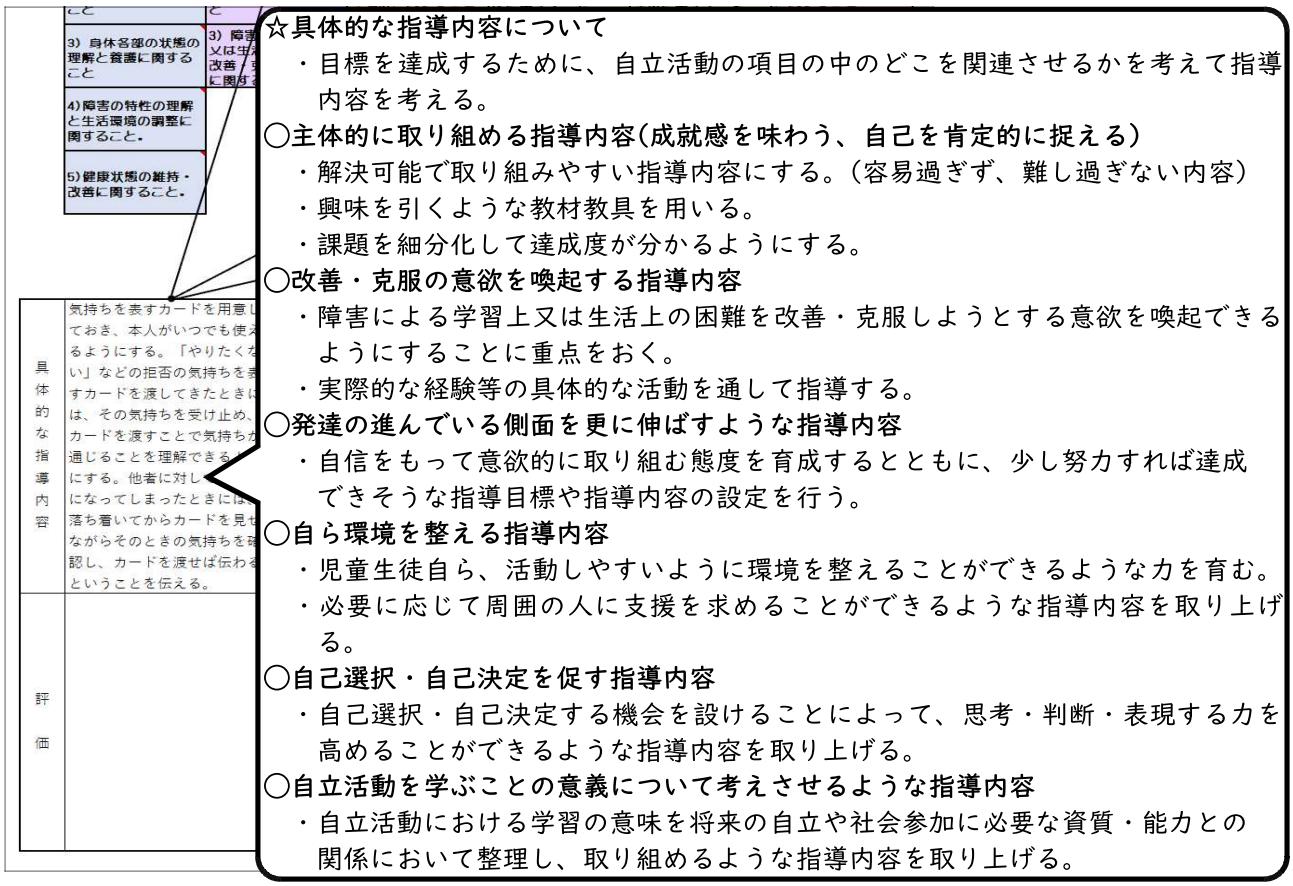


図３　目標・指導内容設定シート記入例と入力画面に示した説明(具体的な指導内容設定)

(2)　15分ディスカッションについて

協力校Ａの小・中・高の各学部に実施した自立活動に関するアンケートの中では、若手教員から「指導内容がこれでよいのかという不安がある」という意見が複数あった。また、経験年数に関係なく「目標や内容が担任の独りよがりになりがちである」「担任の主観になりやすい」「目標や手立ての共通理解が難しい」などの意見があった。

『知的障害特別支援学校の自立活動の指導』(2018)　下山直人　ジアース教育新社で下山は「指導を左右するような計画が、個々の教師任せでよいはずはない」「個別の指導計画の質を担保するためには、学校としてどのような方針、組織、手順等で作成を進めるのか、そのシステムを検討しなければない」と述べている。そこで一人一人の児童生徒について、関わる教師が話し合える場をもつことで、担任の主観に偏ることなく、相談しながら決定できる場となるのではないかと考えた。しかしながら、一人一人の児童生徒に長時間かけてケース会議をもつことは、それぞれの教師の多忙感が増して負担となる。意欲的な参加・積極的な発言を引き出すことを考え、負担になり過ぎず気軽に行える15分の設定とし「15分ディスカッション」とした。

その日にディスカッションする児童生徒の担任は事前準備として付箋に実態を書き出し、関連性を考えておく。付箋の書き方は、目標・指導内容設定シートと同様になるよう、例を示した(図４)。準備した付箋を用い、関連性や担任の考えを説明する。担任の話を受けて他の教師は意見を言ったり、具体的な指導内容を提案したりしてディスカッションを行う(図５)。

15分という短時間での設定としたことで児童生徒の登校前や下校後の短時間でも話合いの場をもつことができる。また、定期的に行うことで個々の児童生徒の様子について複数人で確認する機会ともなる。ディスカッションをすることで児童生徒に関係する教師で意見を出し合って目標や指導内容を考えることができるため、担任の主観による内容になりにくくなる。また他の教師の考えを聞くことで多面的に考えるきっかけになったり、指導内容に不安を抱える時にアドバイスを得る場になったりするのではないかと考えた。その場で考えられた目標や指導内容は、参加している教師に共通理解されることとなり、担任以外の教師とともに一貫性のある指導につなげることができる。

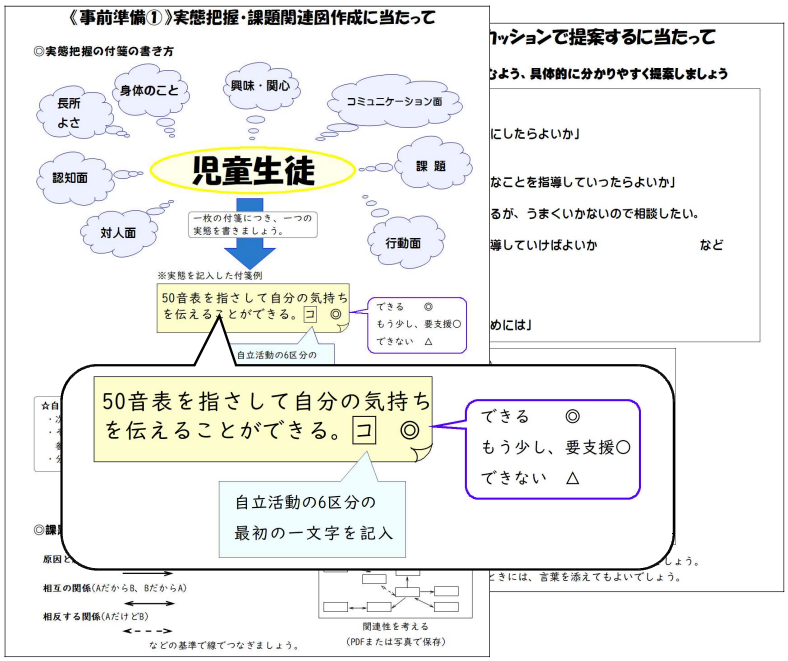


図４　話題提供者に配付した事前準備

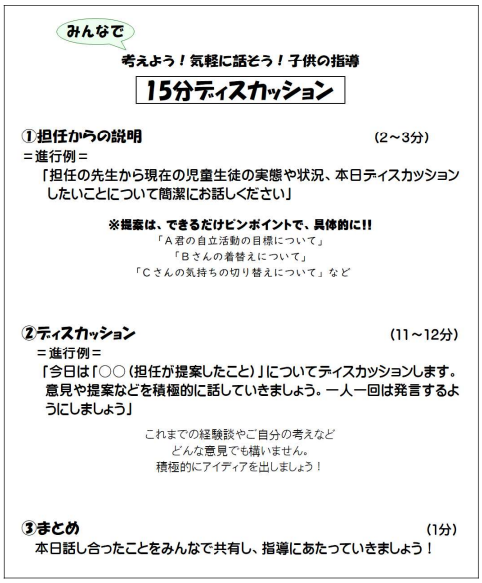


図５　ディスカッション用レジュメ

一度目のディスカッションに使用した付箋はファイルなどに挟んで保存しておく。次にその児童生徒についての話をするときに、保存しておいた付箋の中で不要になったものを削除したり、新たな実態を書き加えたりしながら再度使用することができる。また、付箋をPDFや写真などで保存しておけば、データとしても残すことができる。そのデータを目標・指導内容設定シートの実態と課題関連図の部分に転載し生かすこともできるようにした。

また、目的意識をもって短時間で話し合うことに慣れれば、15分ディスカッションは目標や指導内容を設定する場面以外でも有効であると考えた。「児童生徒の指導について困ったことや相談したいことがある」「グループ全体での授業のときに指導の方向性を確認する」などの場面でも活用できる。何について話し合うかをはっきりさせて、短時間で話合いを行うことで、参加する教師の負担もそれほど大きくはならない。15分の話合いの中で困っている教師がアドバイスを受けることができたり、指導に一貫性をもたせたりすることができると考える。

(3)　キーワードと区分例、目標・指導内容例について

学習指導要領解説には、「障害のある幼児児童生徒の実態は多様」であり、「具体的な指導内容は指導の方法と密接に関連している場合が多い」ため、「自立活動の内容の示し方はある程度大綱的にならざるを得ない」とある。大綱的に示されているため、項目の内容を見ただけでは具体的な指導内容をイメージしにくいこともある。特に経験年数が少ない教師や、特別支援教育に初めて携わる教師は、どのようなことをすればよいのか考えられないという声が聞かれた。

表２　キーワードと区分例

キーワードと区分例

キーワード(き)	区分	キーワード(こ)	区分
擬音語・擬態語	6(3)	語彙の習得	6(3)
着替え	1(1)	更衣習慣	1(1)
利き手	4(4)	更衣動作	5(3)
聞く	6(5)	口腔機能	1(1)
ぎこちなさ(固有感覚)	4(1)	口腔内過敏	4(2)
ぎこちなさ(運動企画)	4(4)	拘縮	1(3)
喜怒哀楽	3(2)	行動の特徴	3(3)
決まり	3(4)	興奮	2(1)

そこで、長崎自立活動研究会(2019)の「自立活動学習内容要素表」からキーワードを抜き出しキーワードと区分例を作成した。抜き出したキーワードを検索しやすいよう50音順に並べ直し、更にいくつかのキーワードを加えて自立活動の区分を例示した(表２)。また、そのキーワードとなっている実態に関して考えられる指導目標と指導内容、手立ての例を示した。目標設定の際は、「場面」「相手」「方法」「具体的数値」などを入れ、行動レベルで観察可能で、評価しやすい指導目標となるようにした。(以下、「目標・指導内容例」と記す)

児童生徒の実態は一人一人異なるので、目標・指導内容例に示された内容をそのまま使うことはできない。しかし、指導目標や指導内容を考えるきっかけやヒントになるのではないかと考えた。

(4)　目標達成のために必要な項目の分析例について

協力校Ａに実施したアンケートの中で､｢各項目を関連付けることが難しい｣という意見が複数出た。関連付けの難しさには、一つの目標に取り組むに当たって、どのような要素に分析されるのかが難しいことが原因としてあるのではないかと考え､分析の例を示した。

分析した要素が自立活動の27項目のどの項目に当たるのかも例示した｡分析した中から、その子供にとってどこが課題なのか、どこに重点を置いて指導していくのかを考えることで各項目を関連付けることができると考えた(図６)。(以下、「必要な項目の分析例」と記す)

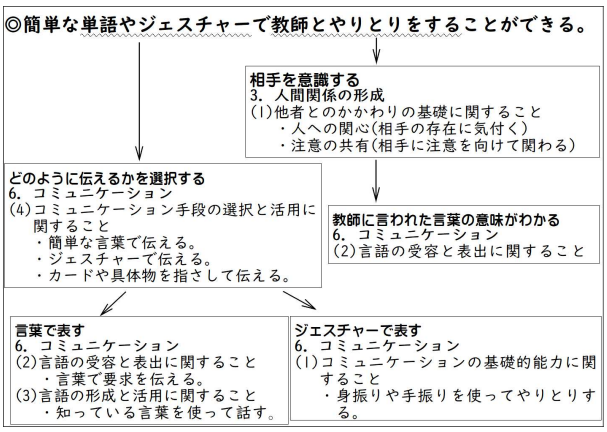
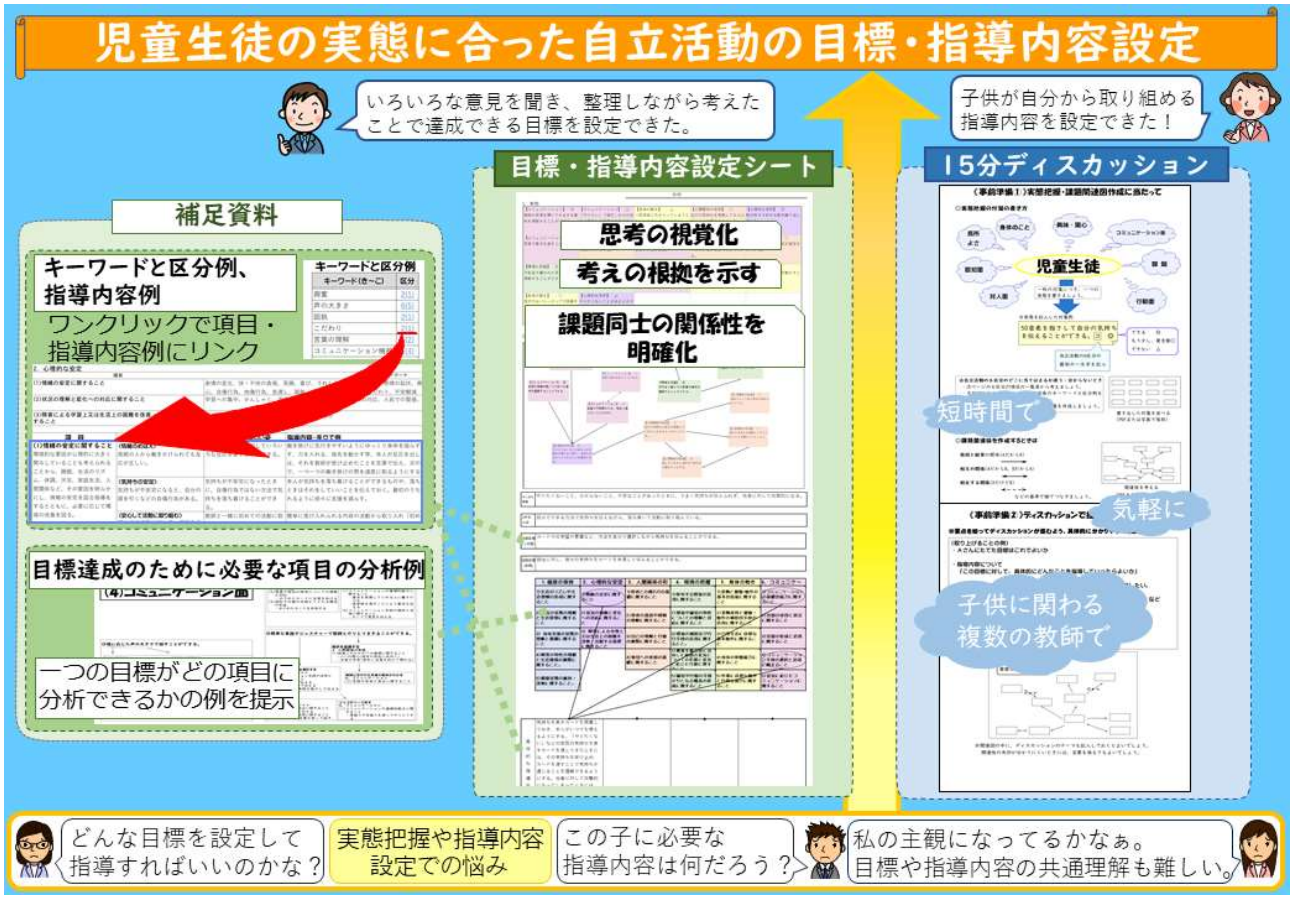


図６　目標達成のために必要な項目の分析例

４　研究構想図



Ⅳ　研究の計画と方法

１　実践の概要

協力校Ａの数名の教師に目標・指導内容設定シートと同じ形式で実態把握から目標設定まで取り組むことを依頼した。また、目標・指導内容設定シート、目標・指導内容例、必要な項目の分析例について自分がそれらを使って自立活動の目標や指導内容を設定するとしたら、どのような点が使いやすいか、どのような点を改善したらより使いやすくなるのかについて、協力校Ａの小学部職員、協力校

Ｂの特別支援学級職員に検討を依頼し、意見を収集した。また、協力校Ａの小学部に、15分ディスカッションの実施を依頼した。

15分ディスカッションでは、事前に話題提供者(担任)にディスカッションの進め方について説明し、話題提供者を中心にディスカッションを進めるようにした。研修員はその様子を参観し、反省点を次のディスカッションのグループに伝えたり、少人数のグループでは司会として参加したりした。また、どのようにすれば15分という短時間で有意義なディスカッションになるかを検討しながらレジュメを改良した。

対象	協力校Ａ　特別支援学校　小学部教諭　16名
実践日時	令和元年9月25日
内容	・目標・指導内容設定シートについて、パソコンを操作しながら説明 （流れ図での作成との違いについて感想や気付いたことの意見収集） ・目標・指導内容例、必要な項目の分析例を提示

対象	協力校Ａ　特別支援学校　小学部教諭　16名　（ａグループのみ2回実施）
実践日時	令和元年10月23日、10月30日、11月19日、11月20日
内容	・目標・指導内容設定シートの形式に基づき、付箋で実態把握と課題関連図作成 ・15分ディスカッション

対象	協力校Ｂ　中学校　特別支援学級教諭　２名
実践日時	令和元年11月27日
内容	・目標・指導内容設定シートについて説明　・シートの操作体験 ・目標・指導内容例、必要な項目の分析例を提示

２　検証計画

検証の視点	検証方法
目標・指導内容設定シート、目標・指導内容例、必要な項目の分析例は、児童生徒の実態に合った目標・指導内容を設定するために有効であったか。	・個別の指導計画を作成したことのある、特別支援学校、特別支援学級の教諭へのアンケート調査及び聞き取り
15分ディスカッションは、児童生徒を多角的に捉えたり、教師の考えを広げたり深めたりすることに有効であったか。	・ディスカッションの実施 ・ディスカッションに参加した教諭からのアンケート調査

３　実践

(1)　目標・指導内容設定シート、目標・指導内容例、必要な項目の分析例に関する実践と考察

①　協力校Ａ特別支援学校における実践と考察

ア　実践

学習指導要領解説に示されている流れ図のとおりに実態把握から指導内容設定までの作成を依頼した。その結果集約した課題点を考慮し、流れ図を基に目標・指導内容設定シートを作成した。

作成した目標・指導内容設定シートを研修員が実際に操作しながら説明し、協力校Ａの職員が流れ図と照らし合わせた中で気付いたことを収集した。また、目標・指導内容例についても画面に示し説明をした。

一方、ディスカッションでの話題提供者には、目標・指導内容設定シートと同じ形式で実態把握から目標設定までの作成を依頼した。

有効な	・細かく書き出すことでこれまで気付かなかった部分にも気付くことができる。 ・一度した作業が次の行程に生かされており、繰り返し記入する手間が省けてよい。 ・色で分けられていることで、見返したときに分かりやすい。

点	・手書きのものを取り込んでも使えるのはパソコンが苦手でもやりやすくてよい。 ・経験が少ない人には、目標・指導内容例のように参考にできるものがあるのはありがたい。
改善点	・実態把握の偏りをなくすために、一度全ての区分の実態を書いてみてもよい。 ・課題の関連付けの例などがあるとよい。 ・パソコンが苦手な人には表計算ソフトの使い勝手が分からず戸惑うことがあると思う。

イ　考察

表計算ソフトを使いリンクを貼ったことにより、一度入力した内容が他の部分に反映される点については概ねよい評価が得られた。しかし、表計算ソフトへの苦手意識が強い人が多いことを心配する意見もあった。目標・指導内容設定シートには難しい設定はしていないので、リンクが壊れた際に参考になるよう、リンクの貼り方をシート内に加えた。

目標・指導内容例については、「若手じゃなくても、参考になると思う。こういうものがあるのはありがたい」という意見も出た。

また、「課題関連図」に関しては書き方がよく分からないという声が複数聞かれた。これまで、関連図を作成して目標や指導内容を設定するという経験が少ないことにより、最終的にどのような形になるのかイメージできないことが原因と考えられた。そこで、関連を表す矢印の意味についての説明に加え、参考になるように実際の関連図の例を示した。

さらに、各項目の関連付けについても、「よく分からないので例が欲しい」という意見が出た。その意見を受け、必要な要素や項目をどのように考えるかの参考にできるよう「必要な項目の分析例」を作成することとなった。

②　協力校Ｂ中学校　特別支援学級における実践と考察

ア　実践

協力校Ｂでは、特別支援学級の教諭２名に対し、「目標・指導内容設定シート」「目標・指導内容例」「キーワードと区分例」「目標達成のために必要な項目の分析例」について説明をし、「実際に作成するとしたら活用できそうか」「参考になるか」などの視点で意見を収集した。

有効な点	・シートがあることで考えが整理しやすく、その子に合った課題を見付けられそうである。 ・考え方がシステム化されていて、指導内容を考えたり考えをまとめたりする手助けになる。 ・分析例のように一つの課題について、細かく分析してあると、どの部分から取り組めばよいのかが分かる。 ・印刷したものを個人ファイルに綴じ込めば引き継ぎ資料としても使えそうである。
改善点	・パソコンが苦手だと取り組みにくい部分もあるが、途中までパソコンで作成し、「線を結び付ける」など難しそうな部分は手書きで作成するなど組み合わせて活用することもできるのではないか。 ・困っていることについてキーワードで検索すると指導例が出てくるとありがたい。 ・文字ばかりの個別の指導計画は読む気にならない。

イ　考察

自立活動に関して、どのような内容にしたらよいか悩むことも多かったということで、考え方の道筋が作られていたり、入力画面にヒントがあったりすることに関して「使ってみたい」という意見が出た。単学級の特別支援学級や通級指導教室など、ディスカッションをすることが難しい環境の先生にも、シートで整理することで有効な点があるということが分かった。

(2)　15分ディスカッションに関する実践と考察

協力校Ａ小学部の四つのグループ(ａ～ｄとする)でディスカッションを行った。各グループ一人の話題提供者(担任)に、研修員から15分ディスカッションの進め方と事前の準備について説明した。また、ディスカッションの進め方のレジュメを配付し、後日各グループごとにレジュメを基にディスカッションを実施した。レジュメの有効性や分かりやすさを確認するために、研修員からは大まかな進め方の流れを説明するのみにとどめた。詳細な提案や進行の方法については各グループの話題提供者がレジュメを見て解釈したとおりに進めることとした。

ディスカッション後には「一人の児童について複数人で考えることについて」「15分という設定について」「話し合う内容について」「その他思うこと」という項立てでアンケートを実施した。また、話題提供者には目標・指導内容設定シートの形式に基づき、付箋を用いて自立活動の実態把握、課題関連図の準備を依頼しておいたため、「準備について」も意見を収集した。

①～⑤に各グループの実践の結果を示し、⑥としてディスカッションに参加した職員からのアンケート結果を示した。

①　ａグループ（４名）

ア　実践

提案の仕方・進め方	ディスカッションの様子
６区分で捉えた実態、関連図を中央に置き、それを見ながらディスカッションを行った。 話題提供者からの説明の後、自由に意見交換を行った。	・提案者に対象児童に関する質問をし、やりとりをしながら話合いが進んだ。 ・ベテラン教師や中堅教師の子供の捉え方や、考え方などを聞く時間が多くなり、若手教師が発言する機会が無くなった。

イ　考察

提案者が挙げた実態や課題に対し、ベテラン教師を中心に中堅教師が時々話すというような状況となり、若手の発言の機会が無かった。また、提案は短時間で行われたが、その後は話が様々な方向に向かい、かなり長時間のディスカッションとなった。その間、研修員は時間を区切ることはせず、話がまとまるまでにどの程度の時間を要するかを観察した。

他者の考えを知る、自分と違う見方で子供を見るという点においては有効な部分があった。しかし、「どのような目標にするか」という広い内容についてだったため、さまざまな意見が出たり、実態のどの部分を課題と捉えるかなどについても話が及んだりして、時間が長くなった。目標設定についてディスカッションをする場合には、実態や課題から担任が仮の目標を立て、その目標についてディスカッションをするなど、要点を絞って提案をする必要性があることが分かった。

②　ｂグループ（６名）

ア　実践

提案の仕方・進め方	ディスカッションの様子
６区分で捉えた実態、関連図を参加人数分コピーして配付し、それを見ながらディスカッションを行った。 話題提案者がレジュメに沿って司会も行いながらディスカッションを進めた。	・実態の自立活動の６区分での捉え方、関連性などにも意見が出て、活発な意見交換がなされた。 ・発言のない人は指名し、全員の意見を聞いていた。 ・課題として挙げられたことに対する具体的な指導方法の例も挙がった。

イ　考察

ａグループのディスカッションの様子を話題提供者に伝え、反省も生かしながらディスカッションを行った。初回だったこともあり、実態やどのように関連性を捉えたかの説明が丁寧になされた。対象児童の課題として２点が挙げられ、その点を中心としてディスカッションが行われた。

提案された話題に対して、複数の教師から関連性の捉え方や課題の原因などについて、付け足しや新たな提案がなされ、活発に意見が出た。また、具体的な指導内容についても、「こうしてみたらどうか」というような具体的な提案が出された。

話題提供者の実態などの説明からディスカッションのまとめまで15分では収まらなかった。初めてのディスカッションの際は、実態について丁寧に説明する時間が必要であることが分かった。しかし、話し合う内容が２点に絞られていたため、話が大きく広がりすぎることも無く、活発なディスカッションとなった。また、数年同じグループで活動していて対象児童をよく知っている教師が複数参加していたことも、活発な意見交換につながったと考えられた。

③　ｃグループ（３名）

ア　実践

提案の仕方・進め方	ディスカッションの様子
事前に作成した付箋、関連図を参加人数分コピーし、それを見ながらディスカッションを行った。 研修員は司会兼タイムキーパーとして、残り時間などを伝えた。	・提案内容がしっかり絞られていたため、その点について様々な意見が出た。 ・課題に対して考えられる原因がいくつかの視点から挙げられたので、その視点ごとにいくつかの考えられる方法が挙がった。

イ　考察

人数の少ないグループだったため、研修員が司会として参加した。提案者からの提案が「上衣を自分で着ようとするには」と限られた内容だったので、話合いの的が絞られディスカッションがスムーズだった。また、話題提供者の説明からディスカッションの内容のまとめまで含めてほぼ15分で終わることができた。

少人数であったことと、話題が「上衣を着ること」と一点に絞って提供されたので、一つの内容についてしっかりとディスカッションをし、短時間で終了することにつながったと考えられる。短時間で有意義なディスカッションにするには、参加者の人数やディスカッションのテーマに具体性をもたせることが重要であると考えた。

④　ｄグループ（３名）

ｄグループの実践は、アンケート回収のみとした。話題提供者からは「付箋を書く際のポイントをはっきり示さないと際限なく書けてしまうので書きにくい」との意見が出た。様々な点を実態として捉えられると、どの点に絞って挙げればよいかが分かりにくくなることが分かった。

⑤　ａグループ（４名：２回目）

①～④の実践での結果を踏まえ、ａグループで２度目のディスカッションを行った。

２度目は「ディスカッションのテーマを絞ること」「一人一人の発言を短くすること」などを確認してから行った。

ア　実践

提案の仕方・進め方	ディスカッションの様子
前回同様、関連図を中央に置き、それを見ながらディスカッションを行った。 話題提供者からの説明の後、自由に意見交換をした。	・テーマが絞られて示されたことで、話が大きく広がることなく、たくさんの意見が出た。他者の意見に質問しながら自分の考えを言うなど、積極的に意見が出し合われた。 ・指導内容についてある程度意見が出たところで区切りをつけ、15分以内でディスカッションを終えた。

イ　考察

２度目のディスカッションだったので、それぞれが時間について前回よりも意識していた。内容がコミュニケーション面に絞られていたので、それに対する具体的な指導内容がいくつか挙げられた。また、他者の意見に質問をしたり、「こういう方法はどうか」というような更なる提案がされたりと、指導内容をより具体的にしながらディスカッションを行うことができた。

具体的な指導内容がいくつか挙がったところで、実態の背景や原因などの話題にまでなりかけたが、「これ以上突き詰めると時間が足りなくなる」と、具体的な指導内容設定までで終わりにした形になった。具体的に絞った内容で話題提供をし、具体的な指導内容についての意見の出し合いであれば15分でも活発な話合いになることが分かった。

⑥　ディスカッション後に行ったアンケートの結果　　（＊は話題提供者からの意見）

	・担任の主観に偏らず、様々な視点で生産的な意見交換ができた。 ・その子供と関わる複数の教師の視点で子供を捉えられ、見方や指導・支援の方法が広がる。

有効な点	・最初の設定が15分なので取りかかりやすい。 ・内容が絞られているとディスカッション内容も充実するし、時間も短縮になってよい。 ・話し合うことにより、次の課題が見えてきて、それに対する情報共有ができた。 ・話し合うことが教師のスキルアップに繋がる。 ＊実態を挙げて付箋を作成することには全く負担はなかった。 ＊ディスカッションの中で考えが修正されたり付け足されたりして、内容の深まりを感じた。 ＊他の教師の意見を聞ける、共通理解の基で指導に当たれるなど、とても有意義な時間だった。すぐに実践できる意見をもらうことができた。
課題・改善点・提案など	・子供の様子を記録したビデオがあると、実態を捉えやすくより意見が出やすいのではないか。 ・参加者はクラスやグループで分けるのではなく、同じ内容で困っている者同士でのディスカッションだと意見が出やすく、なおよいと思う。 ・15分は少し短いように思う。話が盛り上がると15分の区切りを忘れてしまう。 ・学級全員について同じような内容でディスカッションをする時間を取れるかが不安である。 ・初回の実態の共有などは時間が必要である。 ・限られた時間内でまとめるには、具体的な学習課題について、その内容を話し合う程度でないと時間が足りなくなる。 ・15分では終わらないときに話し合う機会を再度設けるための時間の確保が必要である。 ・提案者はある程度ゴールを決めているはずなので、それを示してもらってからディスカッションをするとよいのではないか。 ＊「作成する付箋に何をどうまとめるか」についてのマニュアルがしっかりしていないと、大変時間がかかってしまい、簡易化に逆行する。際限なく書けるようになる。 ＊挙げた実態の中から選択して関連図に表すのは難しかった。

Ⅴ　研究の結果と考察

１　目標・指導内容設定シート、目標・指導内容例、必要な項目の分析例は児童生徒の実態に合った目標・指導内容を設定するために有効であったか。

実際に作成に取り組んだ教師からは「より細かく児童生徒の実態を把握することができた」という意見が得られた。これまで教師の頭の中で考えていた作業を、書き表したり関連図として表したりすることにより、考えているだけでは気付かなかったことに気付いたり、より丁寧に実態や関連性を把握したりすることができたと考えられる。また、単学級の特別支援学級や通級指導教室など、ディスカッションを定期的に行うことが難しい環境の先生方にとっても、シートで考えを整理し、課題同士の関係性を明らかにすることで児童生徒の実態をより的確に捉えることができると考えられる。

目標・指導内容例や必要な項目の分析例について、例を見ることにより新たな考えが浮かんだり、知識を増やしたりすることができるという意見があった。若手教師や、自立活動の指導で悩む教師だけではなく、「他にどんな内容が考えられるか」と、より知識を増やしたり考え方を広げたりしたい教師にとっても活用できるものであることが分かった。

自立活動は一人一人の実態に合わせて指導内容を設定するので、目標や指導内容を自動的に設定するシステムを作ることはできない。教師が子供たちの実態を的確に捉え、実態に合った目標や指導内容を設定していくことが必ず必要になり、大変重要なことである。そのためにも、学校種ごとにより使いやすいように変更を加えたり、作成のヒントを付け足したりしていくなどの改良をしながらシートを使用し、より短時間で充実したものを作成できるようにする工夫が必要であると考えられる。

２　15分ディスカッションは、児童生徒を多角的に捉えたり、教師の考えを広げたり深めたりすることに有効であったか。

ディスカッションの場を設定することで、担任一人で考えていた目標や指導内容の設定について、

複数の人の意見を聞きながら考えることができた。自分の考えとは違う考えを聞くことで、多角的な視点をもったり、考えを広げたりすることができた。また、他者の意見に質問したり他者からの質問に答えたりすることで、より考えを深めたり新たな視点を得たりすることができた。以上のような点において15分ディスカッションは有効であったと考えられる。15分ディスカッションを短時間でも有意義なものにするためにも、話し合う内容の精選が必要であると考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

○　シートを用い、視覚化しながら実態把握や課題の関連性を捉えることで、思考を整理しながら実態を捉えることができた。

○　ディスカッションをすることにより他者の考えを知ることができ、考えが広がったり深まったり、新たな視点を得たりすることができた。すぐに実践できる指導内容を聞くことができた。

○　15分という設定であることで、気軽にディスカッションに臨むことができた。

２　課題

○　目標・指導内容設定シートを作成するには、一定の時間が必要である。児童生徒の実態に迫りつつ、より手軽に作成できる形に変更を加えていく必要がある。

○　目標・指導内容例や各項目を結び付ける例は障害種によって内容が変わってくる。各学校ごとにこれまでの目標や指導内容などを参考に学校独自のものを作成することが望ましいと考える。

○　15分ディスカッションは指導内容について具体的に意見を出し合ったり、話し合う「きっかけ」としたりするには有効性はあった。しかし、課題について深く突き詰めて話していくには時間が足りない。話す内容によって、時間の設定を変えていくことが必要である。

○　ディスカッションは、児童全員に行ったり15分では話がまとまらず複数回行ったりすることになると、例え短時間であっても負担感は出てくる。話し合う内容の精選、場合によってはしっかりと時間を取って話し合うなど、内容による時間の設定が必要である。

Ⅶ　提言

○　自立活動の目標や指導内容を設定する際、目標・指導内容設定シートを用いることで、児童生徒の実態を細かく整理しながら捉えられたり、教師の思考を整理したりできると考える。

○　担任一人で目標や指導内容を設定するのではなく、ディスカッションを取り入れ、考えを広げたり深めたり、新たな視点を得たりすることでより自立活動を充実させることができると考える。

＜参考文献＞

・文部科学省　『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編』　(2018)
・群馬県教育委員会　『第２期　群馬県特別支援教育推進計画』　(2018)
・群馬県教育委員会特別支援教育課　『教員研修パッケージ　ver2』　(2018)
・群馬県総合教育センター　『特別支援教育指導資料第27集　特別支援学級における指導の充実に向けて(2)－自立活動の基本的な考え方－』　(2016)
・長崎自立活動研究会　『自立活動学習内容要素表』　(2019)

＜担当指導主事＞

関根　一美　　金子　百合子